

PHP

Business Shinsho

社員と顧客を 大切にできる会社

「7つの法則」を実践する優良企業48

坂本 光司 Koji Sakamoto

*sapientium verba praecaram sententiam implicant
numquam veterant quamsi tempus eat
sic prudentiam conciliate*

人々が

幸せになり、

『日本でいちばん
大切にしたい会社』
の著者、
初の新書!

モチベーションを

上げ、

伊那食品工業、加賀屋、
メーカーズシャツ鎌倉など、
心に響くエピソード満載。

好業績を呼ぶ

方法とは？



PHPビジネス新書

定価：本体860円(税別)

が、この方々の働きぶりが違うということです。

それは、自分たちがいかに恵まれているかということ、障がい者の方と一緒に仕事をすることによって肌感覚で理解しているからではないでしょうか。

障がい者の方は一心不乱にやります。要領よくやろう、少し手を抜いて楽をしようなどとは考えません。チョークをつくっている生産ラインなどは、とても私たちがかなわないような仕事ぶりです。だからといって生産性は決して高くありません。障がいがあるわけですから当然といえば当然です。

それを見ている健常者は、ほだされて一生懸命にやらざるをえなくなるのです。彼ら、彼女らの分まで自分たちががんばらねばならないと自然と思うようになります。

結果として、会社全体が繁盛する。そういう好循環が生まれることはたしかです。

◆社会福祉法人までつくって雇用を拡大

岐阜県岐阜市に「日本ウエストーン」という会社があります。この会社は、第二回「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞の中小企業庁長官賞を受賞しました。ウエストーンのウエス

とは工業用タオルのことで、ウエスや手袋を分別・洗浄・再利用してリース・販売するのが主な事業ですが、リユースに適した生地の開発をしたりもしています。

社員は二十九人。そのうち六人が障がい者です。ということは二〇パーセント以上。法定雇用率一・八パーセントの一〇倍以上です。しかも、法定雇用率は常用雇用者五六人以上の企業が対象で、二〇一三年四月一日から五〇人になりますが、二十九人の日本ウエストンは対象外です。

なぜ社員数の少ない会社が法律の適用を免除されているかといえば、小規模でそれだけの余裕がないからです。

しかし、免除されていても、やるべきことはやるというのが日本ウエストンです。

障がい者を雇用するようになったのは、知り合いの娘さんが障がい者で、なんとかしてくれないかと懇願されたのがきっかけです。「親はこの子より先に死んでしまう。どうか雇ってくれないか。あなたのところなら安心だから」と言われ、そのときはじめて障がい者を雇用したそうです。

今この会社には、別会社がいくつかあるのですが、そのうちの一つが清徳会という社会福祉法人です。なぜ社会福祉法人をつくったかという点、二人、三人と障がい者を雇用し

ていったら、特別支援学校などで社会に出るための教育が十分に行われていないことが、身をもって体験してわかったからです。そして、傍観者でいられなかつたからです。

社会人基礎力という点、社会人として当たり前のことが十分に教育されていない。しかし、会社は朝から晩までそうした教育をすることはできません。だから障がい者が学校を卒業しても社会は受け付けてくれない、つまり雇用してくれないのではないかと考えます。

そこで、特別支援学校や養護学校と会社の中間体として社会福祉法人を立ち上げたのです。清徳会是一种の学校ですから最低限の授業料はかかりますが、日本ウエストンですぐに仕事ができないうような人でも、社会人基礎力を身につけられ、職業訓練も受けられます。

障がい者の働く喜びと働く幸せを創造するためにこの仕組みを考え、つくりあげたのが理事長の臼井清三さんです。顔を見ると神様みたいな顔をしています。日本理化学工業の大山さんも神様みたいな顔をしています。年齢を重ねた人の顔にはその人柄が如実に表れるということでしょう。

清徳会は、当初は日本ウエストンに就職してもらったために障がい者を教育していましたが、今では一般の企業にも人材を紹介し、優秀な訓練生は一流企業に就職します。巣立った障がい者はもう何十人にもなります。

ただ、どうしても就職が難しいという人もなかにいます。その人をどうするかというと、日本ウエストーンが採用します。

普通に考えれば、いちばん優秀な人を自分たちが採用し、いろいろ就職先を紹介しても採用されない人がいれば、「努力しましたが残念ながら就職できませんでした」で終わってしまうと思います。それでも障がい者のためになることを十分にやっていると評価されるでしょう。

しかしそれではダメだと、社会に出るための教育や訓練を体系的に施して、障がい者自身がいちばん幸せになるような職業選択をさせて、それでも残ってしまう人を日本ウエストーンで引き受けているのです。

◆お母さん(日本一)の言葉

こうした障がい者がどんな仕事をしているかというと、機械のホッパーのなかに洗濯物を入れる、そこから取り出して乾燥させるためにジムにかける、それをたたむ、包装する、トラックに積むなどの作業をやっています。

ただそれだけではなく、他の重要な仕事もやっています。

この会社は見学大歓迎で、一年間毎日のように見学者が来ます。見学者が社内に入るとスリッパが置いてあります。ここまでは他の会社も一緒でしょう。

この会社のスリッパには名前が書いてあります。私なら「法政大学教授 坂本光司様」と書いてあるのです。見学したあと、お疲れでしょうからと、おしぼりが出されるのですが、そのおしぼりにも私の名前が縫い付けてあります。飲み物のコースターにも名前が書かれていて、さらに資料には「○○様」と印刷されています。

私が五〇人連れて行くと五〇人分すべてそうなっている、おもてなし日本一の会社なのです。こうした仕事をすべて障がい者がやってくれています。

「拝啓、昨日は私たちの会社を見学くださり誠にありがとうございます。社員一同心より感謝いたします。また皆様方との出会いに感謝しております。朝刊の一面に皆様が見学にいらしたニュースが出て……」

こうした見学の礼状も届くのですが、これも障がい者の仕事です。本業の仕事だけでなく、おもてなしの仕事でもがんばっているのです。

障がい者がいきいきと働いている姿を目のあたりにすることもあり、この会社を見学し

た人は、間違ひなくファンになります。誰もが応援したくなります。多くの人たちにこんなすばらしい会社があるのだと教えたくなります。

ですから、営業なんかしなくても次々仕事が来ます。お客さまがどんどん増えていきます。だから不況であっても業績は好調そのものなのです。

◆一週の手紙で知った精神障がい者が八割の会社

鹿児島県鹿児島市にラグーナ出版という会社があります。従業員四〇人中、三二人が障がい者、しかも全員が精神障がい者です。

障がい者は、身体障がい者、知的障がい者、精神障がい者に分けられます。そのなかで安定的な雇用という意味でいちばん難しいのが精神障がい者だと思えます。

よく奇声を発するとか、飛び回るとか、二時間しか座ってられないという人もいます。一時的に情緒不安定になるなど、さまざまな障がいがあって精神が安定しない。だから毎日、強い薬を飲んでいる人も多いと聞いています。

日本の障がい者七五〇万人のうち三二五万人、およそ半分が精神障がい者ですが、そのほとんどは雇用されていません。

日本理化学工業は知的障がいの方が多く、日本ウエスンは身体も知的も精神も全部の方を雇用されています。これもすごいことです。

ラグーナ出版は、従業員四〇人のうち精神障がい者が三二人ですから、全従業員の八割が障がい者という会社です。私がこの会社を知ったのは一通の手紙でした。ものすごく分厚い手紙で、差出人は女性の名前で自宅に届きました。

私の本を読んだり、新聞記事や雑誌記事を読んだ感想などが主に書いてありましたが、六枚目の便箋の最後にこうありました。

「いつの日か、私が働いてる会社を訪問してください。そして、私たちの社長さんたちをほめてあげてください。先生、どうかお願いします……」

「私たちがいくら感謝しても感謝しきれない。だから坂本先生に来ていただいて、社長さんたちになんばっていますねと言ってください。きっと、涙して喜ぶと思いますから……」

そういう手紙をある日突然もらったのです。

私は正直驚きました。この手紙を放置したら私も、その他大勢になってしまいます。学